

グローバル人材育成のための小学校外国語活動・小学校外国語教育
－教科書教材にみられる CLIL－

高橋美由紀
山内優佳

1. 小学校外国語活動・外国語教育における他教科との関連

次期学習指導要領では、子ども達の育成すべき資質・能力を育むために、「個別の知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱を、子ども達の発達に応じて、それぞれバランスよくふくらませながら、各教科等の特質を生かし、教科横断的な視点から教育課程の編成を図り、また、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を、教科等横断的な視点で育成していくことができるよう、各学校の特色を生かした教育課程の編成を図るものとする、と言及されている（文部科学省 2018a: 17-19）。これを受けて、2020 年度から本格実施される中学年での外国語活動、および、高学年での外国語教育の学習指導要領の指導計画の作成において、「言語活動で扱う題材は、児童の興味・関心に合ったものとし、国語科や音楽科、図画工作科など、他教科等で児童が学習したことを活用したり、学校行事で扱う内容と関連付けたりするなどの工夫をすること。」と明記されている。そして、「児童が国語科や音楽科、図画工作科などの他教科等で得た知識や体験などを生かして活動を展開することで、児童の知的好奇心を更に刺激することにもなる。」と述べられ、各教科等の文脈の中で身に付けていく力と、教科横断的に身に付けていく力とを相互に関連付けながら育成していく必要があるとしている。

国語科においては、「日本語とは異なる英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむこと（外国語活動）」、「日本語とは異なる英語の音声や基本的な表現を用いてコミュニケーションを図ることで、言葉の大切さや豊かさに気付いたり、言語に対する興味・関心を高めたり、これを尊重する態度を身に付けたりすることにつながる（外国語科）」こと、また、音楽科では拍子やリズム、歌の活動がチャンツや歌など英語の音声やリズムに慣れ親しむことができること、さらに、図画工作科では絵や立体、工作に表す活動を通して、Show & Tell の発話活動につながることなど、他教科の学習の成果を外国語学習の中で適切に生かすことなどが挙げられている（文部科学省 2018b: 45-46, 125-126）。

小学校では担任教師が全教科教える。現在、英語の授業は、英語専科教師と担任教師で指導している。英語の授業に他教科を連携させることで、担任教師は自らの専門を活かした授業を行うことができる。例えば、(1) 国語では、言語的な観点から日本語と英語との比較や、日本語と英語で描かれている絵本の比較をすること等、(2) 社会や算数、理科、生活科等については彼らの日常生活と英語を結びつけて教えること等、(3) 音楽や体育、

家庭科、図画工作等については英語を教育用語として使いながら体験的な学習を通して理解させる等、子ども達の興味関心の高い内容でカリキュラムを組むことができる。

2. 小学校外国語活動・外国語教育における CLIL

CLIL は、1990 年代に EU の言語政策の中で広まり、最近では世界中で注目されている外国語教育の指導法の一つである。非母語（英語）で教科の授業を行うことで、「教科内容知識」「語学力」「思考力」「コミュニケーション力」「異文化理解力」を統合して育成するアプローチである（Coyle, Hood & Marsh 2010）。Coyle *et al.*（2010）は、CLIL は内容と言語の 2 つの焦点を持った方法論であり、教授・学習過程では内容と言語のどちらか一方にだけ焦点が当てられることはないとして、次のように定義している。

Content and Language Integrated Learning (CLIL) is a dual-focused educational approach in which an additional language is used for the learning and teaching of both content and language. That is, in the teaching and learning process, there is a focus not only on content, and not only on language.

(Coyle *et al.*, 2010: 1)

また、Grieverson & Superfine（2012）によれば、「CLIL is the term used to describe the methodology of teaching a foreign language through another subject (content).（中略） Through this method, language is used to learn as well as to communicate and it is the subject matter which determines what language needs to be learnt.」と言及され、多くの国において、中学校レベルで CLIL を活用したカリキュラムで英語を教えていることに成功しており、小学校レベルでも徐々にこの教育が広まっていることを述べている。そして、外国語教育において、中学校や小学校で CLIL を活用する意義として、以下のように述べている（Grieverson & Superfine 2012: 8）。

- (1) Children's educational experience is improved when the subject content is emphasized more than the language used.
- (2) The language is learnt in context and therefore becomes more meaningful to children.
- (3) CLIL is more motivating and provides a wider variety of stimuli for a broader range of learners.
- (4) It gives learners greater exposure to the foreign language in a natural way.
- (5) It does not require extra teaching time.

一方、池田（2011）は、CLIL について「教科を語学教育の方法により学ぶことによって効率的かつ深いレベルで修得し、また英語を学習手段として使うことにより実践力を伸ばす教育法のこと、学習スキルの向上も意図されている。さまざまな教育原理・技法を

有機的に統合することで、高品質な授業を実現する洗練された教育法である。」と定義し（池田 2011: 12）、その特徴を、「内容言語統合型学習であり、「英語と内容を使って両者を学ぶ」ものであり、言語学習と内容学習を有機的かつ体系的に統合し、質の高い教育を行うための具体的方法を与えてくれる」と述べている（2012: 3-4）。そして、CLIL の原理として、「4つのC」と呼ばれるフレームワーク（Coyle et al., 2010: 41）を、① Content、② Communication、③ Cognition、④ Community として示し、次のように説明している。

- ①教科科目等の内容（Content）
- ②教科科目等を学ぶ言語としての言語知識が与えられ・技能が活用される（Communication）
- ③授業ではさまざまな思考（Cognition）を必要とするタスクに取り組む。Cognition では、LOTS（Lower Order Thinking Skills、低次的思考力）と、HOTS（Higher Order Thinking Skills、高次的思考力）に分けて考える。低次的思考力は、「暗記」「理解」「応用」などの力を指す。いわばこれまで教育の中の基本とされてきた能力である。その一方で「高次的思考力」は、「分析」「評価」「創造」などの力を指す。
- ④他者との話し合い、学び合い、教え合い、助け合い、成長し合うペアーやグループによる協学（Community）。

そして、教育においてのさまざまな知見や技法を体系的に取り組むために CLIL の 10 大原則として以下のように示している（池田 2012: 4-6）。

- (1) 内容学習と語学学習の比重は 1 : 1 である。
- (2) 4 技能（読む・聞く・書く・話す）をバランスよく統合して使う。
- (3) タスクを多く与える。
- (4) さまざまなレベルの思考力（暗記、理解、適用、分析、評価、創造）を活用する。
- (5) 協同学習（ペアーやグループ活動）を重視する。
- (6) 異文化理解や国際問題の要素を入れる。
- (7) オーセンティック素材（新聞、雑誌、ウェブサイトなど）の使用を奨励する。
- (8) 文字だけでなく、音声、数字、視覚（図版や映像）による情報を与える。
- (9) 内容と言語の両面での足場（学習の手助け）を用意する。
- (10) 学習のスキル指導を行う。

3. 『Let's Try!』の教材にみられる CLIL

笹島（2015）は、CLIL の学習は実社会で起こるような場面を学習する言葉を介して提供しており、単なる学校での学習から実際の社会での学習につながることを主張している。そして、日本の小学校外国語活動・外国語教育における CLIL の授業では、「私について」「私の特別な日」「学校」「私の家」「季節」「友達」「私の国」「食べ物や飲み物」「休日」「文化」

「宝探し」のようなテーマが考えられると言及している（笹島 2015: 140）。

2011年から外国語活動が教科ではなく領域の1つであるという位置付けで小学校に導入されて以降、文部科学省は『英語ノート』『Hi, Friends!』、そして2017年に公開された『Let's Try!』を発行・配布してきた。2020年度以降に中学年で実施される外国語活動においても、この『Let's Try!』が教材として使用される。ここでは、『Let's Try!』において他教科との連携が可能な単元を例として示す。

(1) 社会科における学習内容が活用できる例

『Let's Try! 1』 Unit 1 “Hello!” (pp. 2-5) など

『Let's Try! 2』 Unit 1 “Hello, world!” (pp. 2-5)

社会科において、学習指導要領では第3学年以降で地図や国旗についての取り扱いについて記載されている。また、色や形の表現をすでに学んだ第4学年であれば、国旗の特徴を英語で説明することも可能である (e.g., It has a circle. / It has three rectangles.)。

『Let's Try! 2』 Unit2 “Let's play card.” (p. 9) など

この単元の「Let's Watch and Think」では、「えいぞうを見て、世界のさまざまな天気とその様子について知ろう」等、日本と世界の国々の天気等から人々の生活について学習できる。

(2) 生活科における学習内容が活用できる例

『Let's Try! 2』 Unit 8 “This is my favorite place.” (pp. 30-33)

この単元では、学校の様々な部屋や場所を表す語句を学び、子ども達が「自分が好きな場所とその理由」を紹介し合う活動が設定されている。この活動は、第1学年の生活科で行われる学校探検と関連づけることができよう。4年生のお兄さん・お姉さんとして、1年生が行う学校探検の引率役をすることによって、自分たちが4年間過ごして見慣れた学校にも新たな発見があるかもしれない。新たな発見や気づきは、紹介する「理由」にもつながる。また、自分自身には好きな場所が見つけれなかった場合、1年生の誰かが興味を示した場所について、その児童になりきって場所の紹介をすることもできる。

(3) 算数科における学習が活用できる例

『Let's Try! 1』 Unit3 “How many?” (pp. 10-13)

この単元では、英語で1から20までの数とその尋ね方について学ぶことができる。Ten Steps をチャンツのリズムで発話すること、及び、「好きな数だけりんごに色をぬり、同じ数字が好きな友達をみつける」活動や国語との連携で「漢字の画数を尋ね合う」等、慣れ親しんだ語彙や表現を活用してコミュニケーションを図ることができる。また、世界の国々数の数え方を通して、「言語、数え方（文化）、数」について日本との比較や他の国の言語と文化について理解を深めることもできる。

『Let's Try! 2』 Unit 4 “What time is it?” (pp. 14-17)

この単元では、時間の表現を使って、何時に何をしているのかについて聞いたり話したりする学習活動が設定されている。算数科においては、第1学年から第3学年において時計の学習が行われる（文部科学省 2018a: 66, 69, 74）。時計の読み方だけでなく、「X時Y分のZ分後は？」といった発問が多く行われる。英語で時間を聞いたり話したりする力が十分に身についたうえで、応用的な学習活動として算数科における学びを取り入れるのであれば、単に時間と行動のみを説明するのではなく、「XX minutes later,」といった表現で担任教員や ALT がすることを説明し、何時何分なのかを考えるクイズができるかもしれない。

(4) 算数と図画工作における学習が活用できる例

『Let's Try! 1』 Unit7 “This is for you.” (pp. 26-29)

この単元では、triangle, square, rectangle, circle, star, diamond, hart 等について、グリーティングカード作りで使う表現 “What do you want?” “A red triangle, please.” やシルエットクイズで使う表現、“What shape is this?” 等を使いながら、算数科における形について学習する。また、図画工作では、1・2年生の学習内容で「好きな形や色を選んだり、いろいろな形や色を考えたりしながら、どのように表すかについて考えること」（文部科学省 2018a: 127）が掲げられていることから、これらの学びを3年生の英語で活かした活動ができる。

(5) 理科における学習が活用できる例

『Let's Try! 1』 Unit8 “What's this?” (pp. 30-33)

この単元では、子ども達が「これは何だろう？」と思うような、自然にコミュニケーションの必然性が生まれる場面を設定している。「虫眼鏡に映るものを見て、何かを考えよう」という活動では、“What's this? A nest? Yes, it's a nest.” 他に “spider, moth, owl” 等、動物や植物等、理科で学んだ教材を「クイズ大会」で使うことができる。なお、理科では、小学校3年生では、身の回りの生物について、「探したり育てたりする中で、それらの様子や周辺環境、成長の過程や体のつくりに着目して、観察、実験などに関する技能を身に付けること」が目標とされている（文部科学省 2018a: 95）。

4. 文部科学省検定教科書にみられる CLIL

平成29年版学習指導要領が2020年度より全面実施となることで高学年の外国語教育は教科（科目）として外国語（英語）が指導されることになった。そのため、『Let's Try!』同様2017年に公開された高学年用教材『We Can!』に代わり、文部科学省検定教科書を使用して指導が行われることになる。本節では一例として『Crown Jr.』（三省堂）『NEW HORIZON Elementary』（東京書籍）を用いて、通教科的な観点を示す。

(1) 全ての科目につながる例

『Crown Jr. 5』 Lesson 5 “I play soccer on Monday” (pp. 62-71)

月曜日には何をやる？ —ふだんよくすることや習慣を伝えよう。

曜日や時間によって何をやるか、日頃の生活で行なっていることを英語で表現する単元は様々に存在するが、特に、教科・科目名を扱うような単元であれば、実際にその教科・科目で学んだ内容、あるいは行った活動を英語で表現することにつながるであろう。児童一人一人の経験ではなく、学習活動としてクラスで行なっている活動が発話内容となる分、教員としては語彙や表現などの事前準備が行いやすい単元であると言える。

(2) 社会科における学習内容が活用できる例

『Crown Jr. 5』 Presentation 3 “Mt. Fuji is beautiful.” (pp. 100-102)

日本のここ、おすすめ！ —おすすめ（場所・こと・もの）とその理由を伝えよう。

“Mt. Fuji is beautiful.” は、5年生最後の言語活動として設定されている。この活動に至るまでに、児童はものの場所や位置を説明する表現を学び（e.g., *It is in the box.* / *Shuri Castle is in Okinawa.*）、外国を紹介する音声を聞いて、自分が行きたい国やしたいことについて話すための表現を身につけている。この活動はおすすめしたい場所や理由（やり取りや発表をする内容）をグループで決めることから始まる。この内容については、5年生の社会科で学んだ地形と気候の違いによって異なる生活や産業に関する知識を活用することができよう。「おすすめ」というと、都市部や人気観光地のような地域が取り上げられがちである。しかしながら、リピーターの外国人観光客が農村地域を訪れており（十河・平田 2017）、国内における観光関連の方針で地方への誘致がすすめられているという現状がある（観光庁 2016）。よりオーセンティシティを高めて、教室の外で外国人におすすめをするという設定をするのであれば、日本の隠れた魅力に注目した「おすすめ」を勧めたい。

『NEW HORIZON Elementary』 5年「日本に暮らすわたしたち」6年「世界に生きるわたしたち」

5年生では、自己紹介からはじまり、子ども達が自分たちの住む地域のこと、そして、日本の紹介ができるようにすることを学ぶ。また、日本で働いている外国出身者による「日本の魅力」を聴き、日本の良さを再認識することもできる。6年生では、子ども達の視野を日本から世界へと広げて、世界の国々の風土や文化について学ぶことや、日本と諸外国とのつながりを理解し、子ども達が「地球市民の一員として生きる」ことへの自覚を促す内容となっている。

『Crown Jr. 6』 Lesson 7 “At This Moment” (pp. 88-97)

今、この瞬間 —日本の文化を伝えよう。ほかの国の文化を知ろう。^{注1}

この単元では、日本独特のものや行事などについて聞いたり話したりし、外国の食や行事などについて聞いて理解する活動が設定されている。社会科の目標の1つには「世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養う」（文部科学省

2018a: 46) とあり、第 6 学年では日本と関係が深い国のことについて記述がある。例えば、『新編新しい社会 6 下』（東京書籍）における「日本とつながりの深い国々」(pp. 60-91) では、身の回りにある外国由来の文化や物資等に目を向け、関わりが深い国について、その衣食住、行事、宗教、街、ニュースなどを調べて情報をまとめる活動が設定されている。社会科の時間に調べた文化等について、児童がまとめた作文や新聞記事を元にして担任教師や ALT などが英語で説明をするなど、すでに完了した学びを外国語授業にも広げたい。また、どの国の情報なのかを当てるクイズをすることも可能であろう。

(3) 理科における学習内容が活用できる例

『NEW HORIZON Elementary 6』 Unit 5 “We all live on the Earth.” (pp. 42-43)

地球に暮らす生き物について考え、そのつながりを発表しよう。

この単元では、「Small talk」の“What animals can you see in the sea?”のやり取りから始まり、海に住む sea turtle の写真が掲載されている。そして、sea turtle の棲み処を尋ねるやり取りとして「Let's read and write」に書かれている、“Where do sea turtles live?” “Sea turtles in the sea.” の表現から、英語の学習を通して、理科の教材である「地球に暮らす生き物」について学ぶことができる。また、そこでの生き物の暮らしと彼らが生きるために食べる餌についても考察でき、生物界の食物連鎖の学習が組み込まれている。

(4) 生活科における学習内容が活用できる例

『Crown Jr. 5』 Try 道案内 (pp. 86-87)

特有な表現が用いられる場面の練習として道案内活動が設定されている。『Let's Try!』との関連で示した学校探検の他に、生活科では地域を探検する単元も設定されている。地域の地形によっても実施しやすさは異なるが、2 年生が作成した「まちたんけんマップ」などを活用して、地域の地図で道案内の練習をすることができる。

『Crown Jr. 5』 Lesson 2 “I can jump high.” (pp. 26-35)

こんなこと、できる？ ーできること、とくいなことを伝えよう。

これは *can* や *can't* を使ってできること・できないことを伝え合う単元であるが、教室外での活用を意識した「実世界の英語」として、世界の標識が掲載されている。英語音声を読み、その内容に合う標識を選ぶ形式や、友達同士でクイズを出し合う形式が設定されている。第 2 学年を対象とした『新しい生活下』（東京書籍）においては、町中で見ることができる標識の写真や絵とともに、その意味を考えるような問いかけがされている (pp. 8, 31, 68)。このように、身近な標識や記号などを題材にすることも可能である^{注2}。

(5) 教科以外の学習活動に関連がある例

『Crown Jr. 5』『Crown Jr. 6』 Story

イソップ物語など世界的に有名な物語が、それぞれ 4 枚のイラストと音声で扱われている

る。学校図書館で短い英語の絵本などを取り扱ってれば、その紹介をし、授業外にもオーセンティックな教材としての英語絵本に触れる機会へとつなげたい。

5. 外国語活動・外国語科へ活用しやすい他教科の教材

ここまで、外国語（英語）や外国語活動の教科書に基づき、他教科と連携が可能になる単元や活動を紹介してきた。反対に、コミュニケーション上の内容となりうる他教科の学習内容から、より外国語に親和性の高いトピックを扱っている単元や学習事項を取り上げ、外国語の時間やその他の短時間学習で活用することも可能ではないか。

本節冒頭の学習指導要領における記述にもあった音楽科があげられる^{注3}。例えば、『小学生の音楽』（教育芸術社）の第3学年においてリコーダー演奏を目的として掲載されている「エーデルワイス（Edelweiss）」、第5学年においてカタカナのふりがな付きで掲載されている「こげよマイケル（Michael, Row the Boat Ashore）」、そして第6学年において日本語で掲載されている「星の世界（いつくしみ深き、What a Friend We Have in Jesus）」といった楽曲がある（山内 2017）。しかしながら、小学校学習指導要領の音楽科においては、歌唱曲として外国の楽曲を取り入れることは明記されていないという点には留意すべきである^{注4}。歌唱のための曲としては、外国の曲の使用を妨げるものではないが、共通教材として日本国内で作詞作曲された楽曲が示されているのみである。当然のことであるが、音楽科で取り扱われるリズムや拍は音楽表現を目指したものである^{注5}。この点において、音楽の教科書に含まれる外国の楽曲を英語で歌唱するような学習活動を、小学校の教育活動全体の中でどの時間に位置付けるべきかについては検討の余地がある。外国語や外国語活動の時間、あるいは特別活動の一環としての行事に関連づけて、音楽の時間に日本語で歌ったりリコーダーで演奏したりした楽曲を英語で歌う活動が考えられる。

また、体育科においても CLIL を活用した授業は効果的である。愛知教育大学附属名古屋小学校（以下「附名小」とする）の第2学年において CLIL を活用した授業を行った。指導者は T1 が鈴木一成（専門は体育）であり、T2 が担任の林瑛一教諭（外国語活動での公開授業者の経験あり）であった。はじめに、体ほぐしの運動として「交流ダンス」と「新聞紙ダンス」の二つを運動教材とした。テンポのよい曲に合わせて、英語でカウントをしたり、TPR の教授法を使って「Go!」「Jump!」と教師の発話に子ども達が身体で表現した。指導内容はいずれも附名小での外国語活動における第1学年で子ども達が慣れ親しんだ表現であった。つまり、使用した英語は、0～10までの数字や容易に聴いて反応できる動作などの既習事項で行った。なお、この活動で使用された音楽は、「交流ダンス」では「Boys Town Gang」の「Can't take my eyes off you」、新聞紙ダンスでは「SMAP」の「Shake」であり、テンポよく英語のリズムに子ども達が乗れる曲であった。この授業後に子ども達に行ったアンケート調査では、形成的授業評価として、「成果」「意欲・関心」「学び方」「協力」の全4観点で高い数値（3点満点中、平均2.86-2.96点）を示した。また、自由記述では「たのしかったです。あとうんどうもまざってえいごもまざってたのしくじゅぎょうができ

たとおもいます。」「うんどうがたたくさんできて すごく手や足や体のぜんたい きたえられて すごくじゅぎょうがたのしい 体いくと外こくごでした!」「とても楽しかった! なげたり おどったり できて楽しかった。すこしえいごもおぼえられました。」といった好意的な感想が散見され、否定的な感想文は見られなかった(高橋・鈴木 2018: 266-267)。

5. 本節のまとめ

本節冒頭でも説明した次期学習指導要領が全面実施される 2020 年度からは教科として高学年に外国語科が導入されることにより、読むこと・書くことが取り扱われ、検定教科書が使用されることから、これまで「慣れ親しむ」ことが目標であった外国語活動とは異なった「勉強っぽさ」が出てくることにより、英語嫌いが増えてしまうのではないかと危惧されることもある。一方で、「慣れ親しむ」ことが目標とされていた外国語活動では、歌やチャンツ、ゲームといった楽しみながら英語表現を練習・活用する学習活動が多く設定されていたことから、「それは意味のあるコミュニケーションなのか」「小学生(特に高学年)の認知的な発達段階にあった活動なのか」といった疑問が投げかけられることが少なくなかった。本節で提示した例はほんの一部であるが、いずれも当該学年程度で学ぶ学習内容、あるいは下級学年における学びを外国語(英語)で追体験ないしは振り返ることが可能であることを示してきた。

小学校に限らず、外国語活動や外国語科の学習内容は、その多くが場面や内容がスパイラルで学ばれるような単元構成になっている。すなわち、通教科的で横断的な学習のみならず、学年をまたいだ学びも可能である。高学年が作成した(文字を含む)ポスター発表を、中学年の聞く活動と関連づけることもできよう。また、本節で生活科の学校探検で示したように、関連のある単元において複数学年をグループにして行う共同活動や、低学年が日本語で学んだことを高学年が学習発表会の場において英語で発表するなど、可能性は広がる。内容に焦点を当てた CLIL 的な学習が、児童の認知発達の水準に合致するものでありつつ、そして下級学年で学習したことを振り返りながら英語で理解したり産出したりすることができるという自己効力感にもつなげたいものである。

注

- 1 『Crown Jr. 6』には Lesson 7 以外にも、コラム「世界のまつり」(pp. 36-37)、「世界の小学校」(pp. 106-107)、そして「Try 買い物」(pp. 62-63)の中で、外国の文化や生活が紹介されている。
- 2 より高度な内容を扱うのであれば、高学年家庭科で扱われる洗濯表示なども活用できる。
- 3 学習指導要領に示されている拍子やリズムといった観点は丸山(2018)に詳しい。
- 4 鑑賞教材としては、第1学年から第6学年まで全ての学年において諸外国の楽曲も取り扱うものとして記載がある(文部科学省 2018a: 118, 120, 124)。楽器については、第

- 5 学年及び第 6 学年で「既習の楽器を含めて、電子楽器、和楽器、諸外国に伝わる楽器などの中から児童や学校の実態を考慮して選択すること」(文部科学省 2018a: 126) と、その使用の可能性が示唆されている。
- 5 音楽科で取り扱う内容として「発音」が記載されているが、その解説で「母音、子音、濁音、鼻濁音などの日本語のよさを生かした発音や語感に気を付け、呼吸を意識した歌い方を身に付ける」(文部科学省 2018c: 62) と示されているように、日本語の発音のみを扱うものである。

参考文献

- Coyle, D., Hood, P. & Marsh, D. (2010) *Content and Language Integrated Learning*, Cambridge University Press.
- Curtain, H.I. & Dahlberg, C.A.A. (2009) *Languages and Children: Making the Match: New Languages for Young Learners, K-8 (4th ed)*, Pearson.
- Curtain, H.I. & Dahlberg, C.A.A. (2015) *Languages and Learners: Making the Match: World Language Instruction in K-8 Classrooms and Beyond (5th ed)*, Pearson.
- Grieverson, M. & Superfine, W. (2012) *THE CLIL RESOURCE PACK*, DELTA Publishing.
- 池田真 (2011) 「第 1 章 CLIL の基本原理」、渡部良典・池田真・和泉伸一 (著) . 『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たなる挑戦 第一巻 原理と方法』東京: 上智大学出版、pp. 1-13.
- 池田真 (2012) 「第 1 章 CLIL の原理と指導法」、和泉伸一・池田真・渡部良典 (著) . 『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たなる挑戦 第 2 巻 実践と応用』東京: 上智大学出版、pp. 1-15.
- 観光庁 (2016) 「明日の日本を支える観光ビジョン」
- 十河久恵・平田篤郎 (2017) 「訪日外国人旅行者の国内訪問地域分布及び訪問地選択に関する調査研究」『国土交通政策研究所報』第 64 号, 14-53.
- 丸山修 (2018) 「英語の歌における音節の扱われ方と小学校外国語科での活用への示唆」『静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会・自然科学篇)』第 69 号, 203-212.
- 文部科学省 (2018a) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示)』東洋館出版。
- 文部科学省 (2018b) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語活動・外国語編』開隆堂出版。
- 文部科学省 (2018c) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 音楽編』東洋館出版。
- 文部科学省 (2015) 初等中等教育分科会 (第 100 回) 配付資料 資料 1 教育課程企画特別部会 論点整理 2. 新しい学習指導要領等を目指す姿 .
- 笹島茂 (編著) (2015) 『CLIL 新しい発想の授業』東京: 三修社。
- 高橋美由紀・鈴木一成 (2018) 「ICT を活用したアクティブ・ラーニングによる授業実践の研究 - 小学校英語における科目横断型学習を活用して」日本教育大学協会年報編集

委員会『日本教育大学協会研究年報第 36 集』 pp. 259-279.

山内優佳（2017）「小学校における外国語授業で活用できる楽曲の選定と指導法の提案－
外国語リスニング研究の知見から」『広島文化学園大学学芸学部紀要』第 7 号, 67-74.